

私を哲学教授にした3冊の本

ㄥㄥ 真理は隠れている。探し出すのはあなた自身だ。 小野しまと

☆ ☆ ☆

私は、ヤスパースの『哲学入門』（日本語訳）、シュヴェーグラーの『西洋哲学史』（日本語訳）、デカルトの『方法序説』（フランス語）の合計3冊を読んで、大学の教師になった。

そのうち、哲学史などと言われているものは、特別な例外を除き、学問の見取り図にすぎないから、真正な哲学書とは言えない。この種のものを読んで、哲学が分かると思ったら大間違いだ。

真剣に読もうとすると、次から次へと出てくる学説紹介に引っ掻きまわされて、かえって頭が混乱してしまうから、ほどほどにしておいたほうがよい。

外国へ遊びに行く時の、旅行案内か附属の地図ぐらいに思っていたほうがよいのだ。もっとも、例外はあって、哲学史を人間の精神の歴史そのものと見て、そこに自分の哲学の全体を賭けているような人もいる。たとえば、ヘーゲルがそうだ。

彼が書いた本は、同じ哲学史を名乗っていても別格だし、また、別の題名が付いていても、全部「哲学史」だと思ったほうがよい。

どうしてそんなことが分かるんだ、とあなたは言うかも知れない。ヘーゲルをろくに読んでもいなくせに、と。

確かに、ヘーゲルを読んだのは、学生の頃、演習に使われた十数頁のテキストだけだ。しかし、『精神現象学』の最初の部分を読むだけでも、そんなことは何もかも判ってしまうのだ。

それこそ、わらし仙人のいう速読術のようなものを、私も無意識のうちに使っていたのかも知れない。読まずして読む極意については、もっと後で語ることにしよう。

速読術といえば、通常の哲学史——カントはこういうことを考え、こういうことを言った、次にヘーゲルは、というような他愛もないことを書いている哲学史——でも、読んで役に立たないというわけではない。速読すれば、いろいろなキーワードを仕込むことはできる。

ただし、この場合、読む側のセンスも問われるだろう。ゴミ箱の中からでも栄養食品を見つけられる能力がなければ、立派なお乞食さんにはなれないように、どんな雑多の中からでも素晴らしいアイデアを発見できる能力がなければ、哲学者にはなれない。

昔は、乞食をすることも哲学者の生きる道の一つだったから、どこかに相通ずるものがあるのだろう。

シュヴェーグラーの『西洋哲学史』は、なかなか面白い本だから、決してバカにはできないが、真正の哲学書でないことは確かである。真正な哲学書というのは、読む者の全身全霊を哲学の中に導き入れてくれる誘惑者のようなもので、それ自体が哲学することの経験を与えてくれるものでな

ければならない。

つまり、哲学の紹介とか解説といったことに終始する哲学案内や入門書のたぐいであってはならないのである。単なる道案内ではなく、情熱を共有する、旅の同伴者でなければならない。

したがって、そのような真正の哲学書を入門書に選ぶことは、初恋の相手に巡り会うようなものである。いろいろ読んでも、自分が好きになれるような本にはなかなか出会えない。

友だちがぞっこん惚れ込んでいるような相手でも、自分の趣味ではないということもある。何を読んだらよいか分からない、といった状態がしばらくは続くであろう。

こういう時は、まず色々と手を付けてみることである。図書館などへ行って、手当たりしだいに読んでみるとよい。つまらないとか、分かりにくいと思ったら、さっさと捨てることだ。そして、次の相手にアタックする。

私がヤスパースの『哲学入門』を見つけたのは、もっと気楽で、偶然の出会いだった。233頁の薄っぺらな文庫本で、とある書店で目に止まったものを何となく購入したのだ。近くの喫茶店へ行って、本の中味と対面したとたんに、ひと目惚れしてしまった。

そこで目にした殺し文句は、「主観と客観の分裂」という言葉だった。この言葉に引き込まれるきっかけは、もうしばらく前から出来上がっていたのだ。

私は、自分の見ている色彩と、私のガールフレンドが見ている色彩とが、同じ赤でも違っているのではないかと前から思っていた。そう疑ってみたり、確信したりを繰り返していた。

彼女と会った時にも、こんな話ばかりしていたせいか、私は彼女に振られてしまった。

結局、自分が見ている世界と、彼女が見ている世界とは違ってるんだ。彼女は別の世界の住人だったんだ、と自分に言い聞かせたのだが、はてな、自分はどの世界にいるんだ、彼女の世界はどこにあるんだ、それらの世界と自分の関係はどうなってるんだ、などと考え始めたのである。

いつもそんなことを考えていたわけではないが、風呂に入ってノンビリした時など、突発的に思い出すのだ。そして、そんな精神状態にピッタリの殺し文句が、「主観と客観の分裂」という問題だった。

それから、しばらくして、この問題にずばり答を出しているように思われた哲学書に、これも偶然出会ったのだ。デカルトの『方法序説』だ。この本も最初は翻訳で読み出していた。しかし、自分が求めている答をそこに見いだそうとすると、どうしてもまだるっこさを感じてしまう。

そこで、フランス語で読まない手はないと思うようになった。私は、高校の三年から独習でフランス語の勉強を始め、大学もフランス語で受験した。結局、そのフランス語で『方法序説』を読み、大学の教員になったのだから、厳密に言えば、3冊の本とフランス語のお陰で一生の仕事を得たと言える。

さて、このデカルトの『方法序説』も薄っぺらな本で、文庫本にすれば、ヤスパースの『哲学入門』よりももっと薄い。哲学史を真正な哲学書と見ないことにすれば、私は、フランス語を手段にして、2冊の薄っぺらな哲学書を読了し、無事哲学の教員になれたわけである。

そのうちの1冊、ヤスパースの『哲学入門』のほうは、日本語訳で読んだ。このことは方法として間違っていなかったと思う。

翻訳ならば、一気に通読することができる。とにかく、本は、一定の時間の流れに乗って、いったん最後まで読み通す必要があるのだ。語感があって、豊かな意味の世界に身を委ねられるのは、やはり日本語による味読しかない。

本の内容は、一種の生き物のようなもので、その全体を一気に捉えるためには、一定の持続性と連続性を必要とする。それには、自分が最も慣れ親しんだ速度で、いま読書していることも、読書に速度があることも意識しない状態で、最後まで読み通すことである。

こういう本の読み方は、わらし仙人流速読術の適用されない読書と言える。わらし仙人も、文学書などは速読せずに、時間をかけて精読したほうが良いと言っている。その理由は、「人が感動するには時間が必要だからです」という。(『30倍速読術』154頁)

まさに、その通り、感動がなければ、初恋の相手と出会うこともない。哲学に初めて出会って、それが好きになるかならないかという大事な時には、母国語で、自然な時間の流れに身を任せて、感動のある読書をしなければならない。

この自然な時間というのは、早くもなく、ゆっくりでもなく、自分自身の習慣になっていて、時間の意識さえ忘れさせる時間をいう。

そして、理想としては、中断があってもならない。読書の途中で、休息したり、食事をしたり、トイレへ行ったり、電話に呼び出されたりして、やむなく中断した時は、その時間を無化するための精神的な操作、一種の心術によって、読書の持続性と連続性を保たなければならない。

ちょうど音楽やドラマの流れを追う時に、中断は許されず、最後まで持続的に聴いたり見たりしなければ、全体の統一的な直感が得られないのと同様である。

哲学書を読むのに、わらし仙人の言うような速読術が必要かどうかということであるが、「感動」ということを基準にすれば、感動のある読書も、感動のない読書も、状況に応じて使い分ける必要があると言える。

哲学研究で、感動のない読書が必要になるのは、年代や著者名・著作名、参照個所を探すといった、まったく無味乾燥な仕事や、誰がどの本で何を論じているかなどという哲学史の知識を得るための作業など、いろいろなケースがある。

それぞれの状況に応じた速読術が考えられるであろう。ただし、感動のない読書と言っても、その読書が仕えている目的によって、さまざまな動機があり、それを支えている感情的な基盤があるはずである。

たとえば、一連の読書が何らかの利益に結びつく時、その読書を支えているのは、将来得られるはずの喜びとか満足といった感情にほかならない。儲けることにも感動があると言うならば、これも決して感動のない読書ではないであろう。

わらし仙人は、一冊の本を50回速読することを勧めるが、人間には、自分がまったく興味も関

心もない本を50回も読めるほどの忍耐力はない。何らかの感動がモチベーションにならないかぎり、50回も読書する情熱は生まれまいであろう。

読書そのものからの感動は得られないが、いずれは感動に結びつくにちがいない手段としての読書がある。そのような読書のためにこそ、速読術を学ばなければならないというのが、わらし流速読術の本意であろう。

そして、この速読術は、哲学研究にも応用できるのである。私自身、無意識のうちにはあるが、速読術に近い読み方をしてきた部分がある。

ヤスパースの『哲学入門』にしても、最初は一度通読したあと、何度かは速読したし、また何度かは遅読した。本の一部に目を通すことは頻りにやったが、その場合は、速読であったり、遅読であったりした。

結局、私が哲学書を読むために用いた方法は、「正読術」「速読術」「遅読術」の三つだったと言える。正読術と遅読術は、私の勝手な命名なので、もっと良い言い方があったら教えてほしい。正読術とは、自然な読書術というぐらいの意味である。

あの頃、わらし流速読術のような確固とした方法論があったなら、もっと効果的で賢明な読書ができたのではないかと考えている。

特に、哲学研究のための補助手段と言える語学の学習に応用できていたら、多くのムダを省くことができたであろうし、私の語学力の中を広げることもできたであろう。

私は、学生の頃、いろいろな言語に手を出したが、多少とも物になったと言えるのは、フランス語、スペイン語、ドイツ語の三つだった。英語は子供の頃から苦手だったので、まともに勉強したことがなかった。

私が習ったことのある原佑先生は、哲学の研究に英語など必要ないとよく言われた。「俺は、学生の頃から英語の本なんて一度も読んだことないよ」

その言葉に影響されたわけでもないが、私も英語の本はほとんど読まずに学生生活を送った。それでも、ヒュームの『人間本性論』の演習には出ていたのだから妙な話だ。思うに、私は、英語についてはすべて速読術で処理していたのだった。

ろくに読めもしないくせに、字引も引かず、文法構造も理解せず、文字づらを眺めるだけで済ましていたのだ。幸い、この分野での英語は、フランス語との共通語彙が多いので、これだけでたいのことは分かってしまう。

私のこの経験は、速読術の語学への応用を考える上で参考になる点が多いと思うのだが、そのことについては別の機会に述べることにしよう。

さて、デカルトの『方法序説』をどのように読んだかということになるが、これは徹底した遅読であった。

フランス語の原文を、一語ずつ細かく分析しながら読んでいく。あらゆる解釈の可能性を考えな

がら、理解を進めていくのだ。一日に数行しか読めないこともある。あるいは、数頁読んだとしても、翌日はもう一度振り出しに戻ってくる。

辞書もウンザリするほど引かなければならない。私は元来たいへんな横着者なのだが、この時ばかりは、バットの素振りを繰り返すのと同じような気持ちで、辞書を使いまくった。

最初は、仏独辞典や仏英辞典まで揃えて、フランス語の微妙なニュアンスを色々な角度から見ようと思ったのだが、これはムダな試みだった。だいたい、ドイツ語や英語の語感が無いので、いくらこんなことをやっても、プラスにはならなかった。

結局、最終的には、中型の仏和辞典と仏仏辞典の各一冊に落ち着いた。この各一冊を選ぶのに、それぞれ類似のものを何冊か試しに使ってみたのだが、自分の好みのも、思考のパターンに合ったものが自然に残ったと言える。

たとえば、仏仏辞典では小ラルース (Petit Larousse) を選んだのだが、語の説明が簡潔なものと要点を的確にまとめていることが大いに気に入った。意味の分類が複雑だったり用例が多すぎると、適切な語を探すのに骨が折れるし、思考の自由が妨げられる。

辞書は、そこに出ている言葉や意味を鵜呑みにするためのものではなく、近似値を知り、より適切な用語や訳語を考えるための道具なのである。語学を学習する時の使い方とは、その点が異なっている。

意味を知っている単語でも、何度も辞書で調べねばならない。たとえば、前置詞の用法が異なれば、哲学的な意味も微妙に異なってくるからである。

その微妙な意味を検討しているうちに、さまざまな問題が派生してくるであろう。優れた哲学書は、数行の文章であっても、無数の問題を含んでいる。『方法序説』がまさにそのような書物なのだ。その無数の問題をことごとく取り出してくるような読み方が必要なのである。

『方法序説』の冒頭は、「良識はこの世で最も公平に各人に配分されているものである」という有名な文章で始まる。「良識」とは何かということを、まずははっきりと押さえておかなければならない。

この文章のすぐ下を見ると、その「良識」が「理性」と同じ意味で使われていることが分かる。さらに理性とは、「正しく判断し、真と偽を区別する能力」だということが書かれている。

そうすると、すぐにオカシイなど感じるはずである。正しく判断する能力、真と偽を区別する能力を理性と呼ぶなら、その能力は、人によって多かったり少なかったりするではないか。何一つ正しく判断できないような人間は、この世にはいくらでもいる。

それが、各人に最も公平に配分されているっていうのは、いったいどういうことなんだ。デカルトは最初からこんな調子の良いことを書いて、その矛盾にも気がつかないのか、と考える者もいるだろう。

しかし、デカルトともあろう人物がそんなへまなことを言うはずがない、とまずは考えるべきなのだ。偉大な哲学者の書いたものを読む時には、いったんはすべてが真理だと思って読まなければ

ならないと、ヤスパースも『哲学入門』の中で教えている。

そこで、まずは、辻褃の合う論理があるのかどうかというところから見ていかなければならない。私は、大学の卒業論文を書くまでに、その答を見いだした。デカルトの論理は、まったく矛盾を含んではいなかったのである。

その後、デカルトについて書かれた解説書や研究論文もいちおう点検してみたが、誰もそのことは書いていなかった。それなら、他の研究者の論文や本を読んだことになるではないか、と言われそうだが、私は、このことが書いてありそうな個所をただ斜めに見ただけである。

デカルトについての研究書や論文は、それこそ厩大な数があつて、そんなものに真剣に取り組んでいたら、一生かかっても終わらないであろう。

ただ、学者の中には、他人の学説を集めてリストを作ったり紹介したりすることの好きな人がいるので、その人の書いた本や論文にざっと目を通せば、他の多数の研究には目を通さなくてもすむ。

私は、原則として、他者の研究を読む必要はないと思っている。それは、人それぞれの修行の記録にすぎないのだ。自分には自分の道がある。

ちょっとキツイことを言うけど、他の研究者がデカルトから取り出してくる問題を、自分も同じように取り出してくることができないのだとしたら、哲学はやめたほうがいい。

他人の学説や研究を寄せ集めて論文を書いたり研究書を出すだけでも、うまくやれば大学教授になれる。ただし、この場合は、大量に他者の研究を読まねばならない。そして、自分に正直ならば、いずれ後悔するであろう。この仕事は、自分の天職ではなかったと。

逆に、哲学書を3冊しか読まないでも、うまくやれば大学教授になれる。ただし、この場合は、一つ条件が付くであろう。3冊以上は読まないでも済ませることができかどうかということである。

私は、幸い、デカルトという偉大な哲学者の研究を選んだお陰で、彼のわずかな文書を突っつき回しているうちに、大学生と大学院生の身分が終わっていた。

[2006/12/05 magmag]